

鳥居龍藏と日向 —フィールドサーヴェイの分析を通して—

田畑久夫

Ryuzo Torii and Hyuga —Analysis of his field surveys—

Hisao Tabata

Ryuzo Torii has done a number of field surveys in Japan as well as overseas. However little attention has been paid to his studies conducted in Japan so far. In this paper I aimed to explicate some of his studies in Japan, taking up his field study at Hyuga as an example. In his Hyuga survey I have established and developed his theory based on the ruins and the remains which he had excavated. I believe this method is the very positive approach which he advocated. Also, the remains that he had excavated turned out to be useful materials to explicate the origin and source of the Japanese race and culture.

1. はじめに

鳥居龍藏は、拙著¹⁾などでも論じてきたように、わが国において欧米の先進諸国から導入された科学的技法を用いて、海外でのフィールドサーヴェイを最初に実施した研究者として大変著名である。しかし、鳥居は、かような海外におけるフィールドサーヴェイの一方において、日本列島各地でのフィールドサーヴェイにも精力的に実施してきた（第1表）。かかる点に関しては、鳥居龍藏の唯一の本格的な自叙伝であり、鳥居の偉大な研究成果を研究者は勿論のこと、広く一般の読者に紹介した中園英助の著作²⁾においてもほとんど論じられなかった。そのた

め、日本国内でのフィールドサーヴェイに関する多数の研究業績があるにもかかわらず、従来においては、鳥居龍藏の日本国内での研究は等閑視され続けられてきたといえる。³⁾

このように、鳥居龍藏の日本でのフィールドサーヴェイに基づく研究業績は、従来顧みられることが少なかった。しかし、海外でのフィールドサーヴェイに基づく研究業績についても、同様に等閑視されてきたことが指摘できるのではないかと推察する。かかる点に関しては、拙論⁴⁾の中で論じたことがあるが、要約すれば次のようになる。

すなわち、鳥居龍藏の東アジアに関する業績

第1表 鳥居龍藏のおもな国内調査歴（東京近郊をのぞく）

年代 (年)	主な調査地域	調査内容	同行者
明治25 (1892)	千葉県網島	貝塚	
明治27 (1894)	埼玉県秩父・浦山	土俗	阿部正功・大野延太郎
明治30 (1897)	徳島県木頭	土俗	
明治34 (1901)	岐阜県白川郡・石川県能登半島	土俗・人類	
明治37 (1904)	奈良・大阪・和歌山・三重の各府県	人類・考古	
明治37 (1904)	沖縄県	考古・人類	
大正3 (1914)	宮崎県	考古	
大正6 (1917)	奈良・大阪・和歌山の各府県	人類・考古	本山彦一
大正7 (1918)	長野県諏訪	考古・人類	
大正9 (1920)	長野県諏訪	考古・人類	
大正9 (1920)	福島・新潟の各県	考古・人類	
大正10 (1921)	長野県上伊那・木曾	考古・人類	
大正11 (1922)	徳島県城山	貝塚	
大正14 (1925)	宮崎県延岡	考古・人類	
昭和元 (1926)	宮崎県延岡	考古・人類	
昭和4 (1929)	宮崎県延岡	考古・人類	

〔出所〕鳥居龍藏 (1977)『鳥居龍藏全集 別巻』朝日新聞社などより抽出・作成

は、東京大学総合資料館 (1991) を皮切りに、国立民族学博物館 (1993)、徳島県立博物館 (1993)、北海道立北方民族博物館 (1994) などわが国を代表する博物館・資料館において、特別展として展示された。かかる特別展は、従来において等閑視され続けてきた鳥居龍藏の海外における研究業績が高く評価されたものであると看做すことも可能である。しかし、博物館・資料館とはいえ、展示の主体は鳥居が現地において収集した民具や撮影した写真であり、研究業績自体の紹介・展示ではなかった。つまり、これらの民具や写真に関しては高く評価できるが、研究業績の評価にはまだ達していない、というのが現状のようである。⁵⁾

しかしながら、とはいうものの、日本を代表する博物館において、鳥居龍藏の研究成果の一部が展示・公開されるということは、徐々にではあるが、鳥居の研究業績自体も再検討されはじめたということになろう。すなわち、このことは、いわゆる近年の日本文化論あるいは日本人論などに関する関心と深く関連するものと思われるのであるが、多くの研究者の間では、日

本文化および日本民族の起源や源流に関する研究が非常に注目されるようになってきた。⁶⁾ その場合の研究あるいは分析視角として、鳥居龍藏が試みた方法つまり人類学・考古学を主体として歴史学・民俗学・地理学などの関連諸分野⁷⁾ の学問的方法を学際的 (interdisciplinary) に用いることは、実証主義的に問題に対処しているとする手法が、大変有効であると認められつつある結果であると考えられる。

日向国を中心とする鳥居龍藏の調査・研究は、まさしくかかる分析視角によって最大の成果をもたらしたものであるといえる。本稿では、日向を中心とする鳥居龍藏の調査・研究を通して、鳥居のフィールドサーヴェイの特色を論じるとともに、鳥居の主要な研究対象⁸⁾ の1つである日本文化および日本民族の起源や源流に関する見解についても言及していく。すなわち、鳥居龍藏は日向調査において自ら展開する日本文化および日本民族の起源や源流についての持論を確信したといえる。⁹⁾

2. 調査の発端とその経緯

鳥居龍藏は、日向調査を実施する前年、すなわち明治45年（1912）に、朝鮮半島北部の平安北道および満州¹⁰⁾ 地方のフィールドサーヴェイに出かけている。¹¹⁾ この朝鮮半島調査は、明治43年（1910）に開始した予備調査を皮切りとして、大正5年（1916）まで合計6回にも及ぶ長期間にわたるものであった。鳥居は、朝鮮半島調査に従事する以前、明治28年（1895）の遼東半島からはじまる台湾・千島列島北部・西南中国・満州・蒙古へと続く一連の日本列島周辺の東部諸地域の調査を大変精力的に行ない、ようやくこれらの東アジア各地域におけるフィールドサーヴェイが軌道に乗りだした、まさにそのときに実施されたのが日向調査であったといえる。

すなわち、日向調査は、毎年のように行なわれている海外におけるフィールドサーヴェイ¹²⁾ の間隙をぬって実施されるという、非常に多忙な折に行なわれたものであった。しかしながら、それにもかかわらず、当時の海外でのフィールドサーヴェイにおいて輝かしい研究成果をあげたのと同様に、日向調査においても多大の研究成果がもたらされた。かかる点は、鳥居龍藏が当時40歳から50歳の年代で、もっともフィールドサーヴェイを活発に実施することができた時期に相当することも、一因と考えられる。¹³⁾

前述の朝鮮半島調査は、主として鴨緑江流域と満州との関係を考察するために実施されたものであった。具体的にいえば、その前年（明治44年、1911）に行なわれた朝鮮半島調査は、咸鏡道¹⁴⁾ およびロシア領と接する豆満江流域が中心であったが、その調査と比較対照する目的をもっていた。すなわち、両年に実施された調査によって朝鮮半島基部の東西の地域的特色を把握しようとするものであった。

明治45年の朝鮮半島調査のコースは、最初に遼東半島の先端に位置する旅順に向った。旅順

は明治28年（1895）にはじめて実施した海外でのフィールドサーヴェイの拠点で、その後満州調査においても度々滞在した旧知の場所であった。¹⁵⁾ ここで、満州総督府を訪問し、調査の便宜を種々計ってもらうことにした。満州での調査は、吉林省内にある女真文字で書かれた碑文や石器採集などを中心に行なった。その後、好開土王（好太王）の石碑の見学や土城調査などを主体に、鴨緑江周辺地域の遺跡調査を実施し、出発点であった京城（現ソウル市）に3月4日無事帰ってきた。

京城に到着後、東京に戻ろうとしていたとき、初代の朝鮮総督府長官である寺内正毅から有吉忠一宮崎県知事宛の書簡がとどいている由を告げられた。その書簡には、日本への帰途宮崎県に立ち寄り、日向を中心とした古墳調査を行なってほしいという依頼が書かれてあった。鳥居龍藏は、この有吉宮崎県知事の依頼を承諾することに決めた。同行は、今回の朝鮮半島調査と同様に画家の佐藤醇吉であった。

それでは何故、有吉宮崎県知事が西都原を中心とした日向国の古墳調査を必要としたのであろうか。理由は次の通りであった。すなわち、当時西都原の台地には、天孫瓊々杵命とその紀木花咲耶姫の御陵と伝えられている男狭穂・女狭穂の2大古墳を筆頭に、前方後円墳30数基を含む、いわゆる西都原古墳群の存在が知られており、この地一帯が神代日向の歴史を秘めた最有力候補地と看做されていた。ところが周知のように、明治7年（1874）に公布された太政官布告によって、古墳の発掘は勿論のこと調査もできなくなった。しかし、明治時代の末年から大正初年にかけて政府や地方公共団体などにおいて、史跡保存事業が再考される気運が非常に高まった。そのとき、有吉宮崎県知事は新任の知事になったこともあり、西都原古墳の調査・発掘を行ない、これによって、日本建国の歴史

を解明すると同時に、史跡として保存顕彰することが自分の責務であると考えたからであった。¹⁶⁾

3. 調査コースと調査内容の特色

1) 日向予備調査¹⁷⁾

鳥居龍藏は、日向調査を合計4回実施している。¹⁸⁾ 第1回目の調査(日向予備調査)は、前述したように有吉宮崎県知事の直接の依頼を受けて実施されたものであった。主要な調査地点は、前章で論じた西都原と延岡一帯の2ヶ所の古墳発掘調査であった。¹⁹⁾ 鳥居は、次のようなコースをたどって古墳を中心とする遺跡調査を行なった。²⁰⁾ (第1図)。

すなわち、大正2年3月26日に京城を出発し、翌日門司に上陸した。門司から鎮西府が置かれていた大宰府に行き、ここで2日間滞在して都府楼などの遺跡調査を行なった。その後、熊本市に到着した。熊本市では、宮崎県書記田村正一が鳥居龍藏を待っており、以降、田村の案内で宮崎県に向うことになった。まずコースを東にとり、阿蘇山南麓を進みながら、宮崎県の西臼杵郡に入った。そこで、今回の調査地の1つである高千穂の調査を行なった。高千穂の調査では、当地に無数の横穴が存在していたことが非常に注目されたが、古墳墓がまったく存在しないという事実も明らかとなった。さらに、古代の原始的な山城とされる館チャシの遺跡が存在することが判明した。この館は、前年度調査を試みた朝鮮半島および満州地方のものと同一の形式であることも分かり、比較研究する必要があることが大いに痛感された。²¹⁾ なお、高千穂は山間部に位置しているにもかかわらず、横穴以前つまり有史以前²²⁾ において人が居住しており、石鏃や石斧などの遺物が随所に存在することで知られている。

高千穂の調査を終了した後、五ヶ瀬川に沿っ

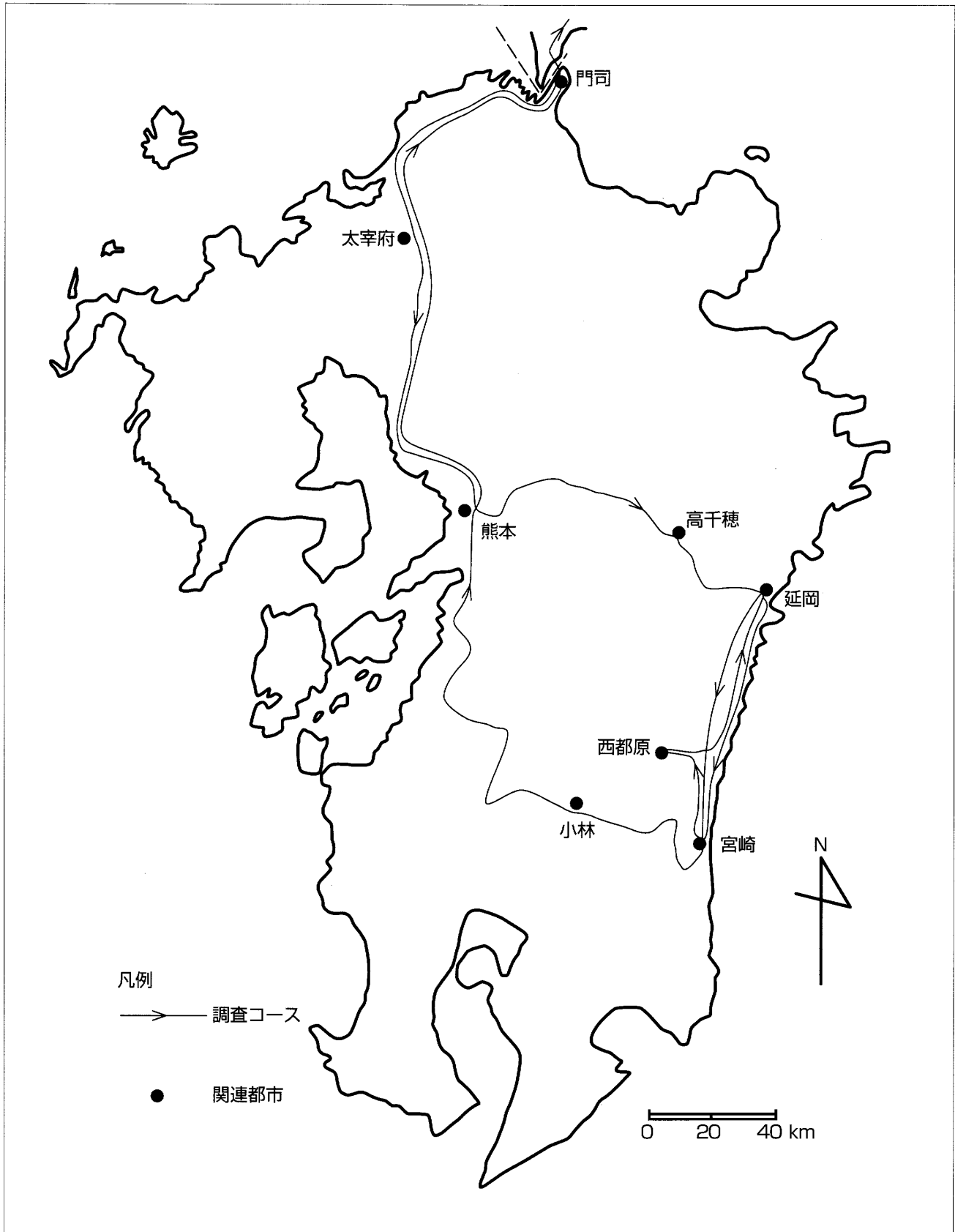
て下り、延岡に到着した。延岡においても数日間滞在し付近一帯を調査したが、調査において石棺が多く存在することや山城の形式をもつ史跡があることなどが注目された。その後、海岸に沿って南下し、美々津・高鍋を経て宮崎市に到着した。宮崎市では、今回の調査の依頼を受けた有吉宮崎知事の出向えがあった。そこで、知事らと調査に関する種々の打ち合わせを行なった後、西都原²³⁾ に向った。西都原は古墳が密集して存在する場所として有名で、昨年(大正元年)末より今年の初頭まで東京および京都の両帝国大学や宮内省などの研究者が調査した地点であった。鳥居は、この地で約2日間古墳を中心とした発掘調査を行なった。その調査の印象を、

この地は奈良朝時代に於ける日向の中心地にして、国府及び国分寺の如きもここに存在したるのみならず延喜式内社たる都万神社の鎮座せるありて、なほ名所旧蹟、伝説地に富めり。而して古墳は実に数百の多きに達して、その形式また種々あり、かの景行天皇の行宮所たりし高屋の遺跡を初め、古代の城砦たる館趾チャシの存せるもの甚だ多く、かつ有史以前の遺跡頗る豊富なり。

²⁴⁾

と述べ、今回の調査の主要な責務を終了した。その後、高鍋を経由し延岡にもどった。延岡では貝塚や古墳などの発掘を行なった。そして、再度南下して宮崎市に入り、南方、跡江、高岡など大淀川流域の古墳調査に従事した。かかる宮崎市周辺の調査が終了すると、小林市に向い、そこから列車に乗車して熊本市に出た。熊本市からは同様に列車で東京に帰ってきた。調査日数は延40日余りにのぼった。

かように、朝鮮半島調査後の疲労も回復する余裕がないままで日向調査に望んだのであった。その主要な関心は、



第1図 日向予備調査のコース

〔出所〕 鳥居龍藏 (1918) 「日向古墳調査報告」宮崎県史蹟調査報告 3、鳥居龍藏 (1976) 『鳥居龍藏全集 第4巻』朝日新聞社552～576所収より作成

今この古国日向は人種学上及び考古学上いかなる事実の存在せるならんか、予は今回の調査に於ては主としてこの見地に於て注意する所ありたり。²⁵⁾

と記しているように、日向の地は、古来神代の地あるいは上代史の地として特殊な地位を占めているが、その地には人種学および考古学的にはどのような事実が存在するかを解明しようとしたものであった。かかる事実の解明こそが前章でも論じたように、有吉宮崎県知事の依頼内容であった。

2) 第2回・第3回日向調査

鳥居龍藏は、大正14年(1925)4月10日から同月末まで20日間という短期間ではあるが、日向の古墳を中心とする発掘調査を実施した。この調査が、第2回日向調査と称されているものである。²⁶⁾しかし、鳥居龍藏自身は、今回の日向延岡の古墳を中心とする発掘調査に関して、当初調査を行なうことを断ったのであった。その理由は、

学術研究には易や靈感やを許さない。私(鳥居龍藏のこと－筆者註)は最初延岡に来ることを断った。易や靈感などでわかれば特に学術上から調べる必要がないからである。しかるに学術上の調査であるが故にお引き受けして来たわけだが一種の哲学観からかかる哲学説を抱持せる人ありとすれば、この人と私との間には大きな溝のあることを断り置きます。²⁷⁾(下線筆者)

ということであった。すなわち、上述の下線部にみられる人とは、日向延岡の神代聖跡彰事業の推進役の中心であった村上某のことである。村上某は、南方村(現延岡市)に鎮座する天下^{アマノ}神社に村人を多数集め、東京から招いた工学士を霊媒として占わせたところ、境内の2基の古墳が皇神2神の墳墓であるという神託を得たと

いう事件があったからである。²⁸⁾かように、現地において発掘調査する以前から解答がでている古墳に関して、鳥居龍藏は発掘調査することを断ったのである。かかる点も、鳥居龍藏が、自身の学問的態度である現場に出かけ、そこで実際に対象物を見学したり、手にとって触れたりして確認した後にはじめて判断を下すという、実証主義的立場を堅持したからである、と推定できる。

とはいうものの、鳥居龍藏は、日向予備調査を実施して以来、日向の古墳の発掘調査を再度行ないたいという願望を強く有していたことも事実であった。既述のように、日向予備調査においては、西都原と延岡一帯の2ヶ所の古墳に関する調査が主体であった。しかし、前者の西都原古墳群については、日向調査の前年の大正元年(1912)から同6年(1917)まで、東京帝国大学や京都帝国大学を中心とした多数の研究者により、前後5回にわたって発掘調査が実施された。²⁹⁾かかる大規模な発掘調査が行なわれたこともあり、鳥居龍藏にとっては、後者の延岡一帯の古墳を中心とした発掘・調査を期待していた。そのため、最初は上述したような理由で、一度は日向の発掘調査を断ったものの、最終的には延岡一帯の古墳を中心とした発掘調査を実施することにしたのであった。かかる経緯は次のとおりであった。

つまり、地元延岡の有力者の1人³⁰⁾などは、延岡地方が『記』・『紀』の神代と深い関係があると思われるにもかかわらず、一向に誰もそのことに触れるものが存在しない、と常々思っていた。このような考え方をもち人々が延岡周辺に多く存在した。かように、延岡一帯の古墳の精密な発掘調査を望む声が高まっていたのであった。そのとき、鳥居龍藏が行なった日向予備調査の中で天下古墳³¹⁾の内容が広く知られると、その内容に多大の興味をもった旧延岡藩主

内藤子爵家が鳥居に対して、延岡一帯の古墳などの遺跡・遺物の発掘調査をしてもらいたいと申し出たのであった。³²⁾

以上述べたように、第2回日向調査は多少の紆余曲折があった後、調査が開始されたのである。しかし、上述したように、調査期間が短かく限定されたため発掘調査は、南方村にある吉野および天下の有石棺古墳が主体で、他に大峡の巨石遺跡³³⁾などにおいても調査を行なった。今回の収穫は、勿論古墳自体の発掘に関しても多大の成果がもたらされたが、それにもまして成果をあげたのは、大貫神社の大石、その傍らに位置する石槨の大石、大峡の立て石³⁴⁾など大石あるいは巨石の遺跡を多数発見したことであった。このように、大石や巨石を多用する文化を西洋では巨石文化と称しているが、延岡周辺においてもかかる巨石文化がみられることが確認できたことである。³⁵⁾その後、これらの巨石遺跡の発掘も古墳と同様、日向での調査の中心となる。

続く第3回日向調査は、翌年の大正15年(1926)4月10日から同月末まで実施された。調査期間は第2回日向調査と同様短期間であった。今回は発掘調査を能率的に行なう必要などもあり、東京から助手2名³⁶⁾を同行させた。調査内容は調査期間が短かいこともあり、五ヶ瀬川河口に位置する東海村(現延岡市)などに存在する古墳と周辺に散在する巨石遺跡に限定した。³⁷⁾

鳥居龍藏は、東海村では最初に檜山古墳を調査した。同古墳は去年(大正14年)の同村祝子古墳調査のとき、近くの丘陵上に古墳らしきものが存在するという直感的な感じとっていた古墳である。第2回日向調査以後、かかる丘陵上の樹木が伐採され、古墳が現われてきたのだった。その古墳を発掘調査してみると、形式は前方後円墳で、周囲には陪塚らしき古墳も

確認できた。さらに調査の結果、同古墳の盛土の上部に葺き石が置かれていることが判明した。それをみて、鳥居はこの古墳ではじめて完全な状態の葺き石を出土できたとして非常に喜び、助手とともに発掘にとりかかった。発掘の結果、かかる古墳は未だ未盗掘であり、この点からも重要なものだった。また、鳥居がいう代表的な「移動遺跡」³⁸⁾の特徴を示す古墳でもあった。

次に恒富村(現延岡市)陵森古墳の発掘調査に従事した。陵森古墳は丘陵上に位置し円墳と前方後円墳があった。円墳を発掘した結果、その内部に石棺のような形をした粘土棺があることが分かった。しかも、この粘土棺には底がなかった。つまり、「底なしの粘土棺」とでも称すべき棺であった。このような特異な様式となったのは、大木の根が張り出して粘土棺の底を突き抜いたのであった。また前方後円墳も発掘したがその内部に石棺がみられた。そしてさらに、この石棺の下に別の石棺があった。その下部の石棺の周辺からは鏃の破片や吹き玉が100本余りも出土した。かような事実から、石器時代においてもこの地に人々が居住していたことが判明した。このことは、近くに石器時代の遺跡地が存在することなどから裏づけられた。

その後、富高村(現日向市)の伊勢が浜を調査した。³⁹⁾理由は、この付近一帯(「細島アイランド」)には、石を用いた遺跡が非常に多くみられるという特色がある。かかる点は、東海村や恒富村の古墳(「大陸派」⁴⁰⁾)とは異なり、すべて石槨式古墳である。さらに、このタイプの古墳は、外壁も石によって囲まれている他、天井石もあり、その上部に積み石が置かれているという構造となっている。かように、鳥居龍藏が主張する「細島アイランド」の古墳と「大陸派」の古墳とでは、様式などの点においてまったく異なっている。その相違点を比較したの

が第2表である。このように、「細島アイランド」の古墳が石を多用するという特殊な構造を有するのは、「1つの民族であるけれども異なっている。これはどういうわけか。これについては考えがあるけれども今は申しません。⁴¹⁾」とその理由を明確にしてはいない。しかしながら、鳥居龍藏の上述の引用文の行間を読むと、「細島アイランド」の古墳を築造した集団は、海岸部であることから、この地に漂着した異集団の影響を受けていることを示唆しているように思われ、大いに関心がもたれる。

さらに、東海村の山間部に位置する大峽の巨石遺跡を調査した。鳥居龍藏は、この巨石遺跡を我々の祖先が古墳を築造する以前の時代につくられた遺跡であると考えた。かような古い時代に、延岡周辺の他の地域においても、同様の巨石遺跡が存在していた、と看做される。しかし、大峽のみが、前述したように山間部に位置するため、後代に破壊されることなく残ったものであろう、と推定した。またここでも、鳥居は、ドルメンやストーンサークルを発見し、大変精力的に発掘を行なう。なお同様のものは「細島アイランド」においても確認されている。それ故、鳥居は今後の研究課題として、

さて、先史時代にはこういうふうに巨石を盛んに用いていたのが、歴史時代になると、その巨石を用いていた民族が、勾玉や管玉を使う原史時代になるとごく貧弱なものになっ

てしまう。割り抜き石棺とか、組み合わせ石棺とかいってもそう大きなものではない。

何故こうなったか。⁴²⁾

を検討する必要があると論じた。すなわち、このような変化が生じないのは時間的な年代とともに、それらを担った集団にも変化があったのではないかと考えられる。かかる視点からの分析を今後研究する余地が大いに存在することを指摘しているのである。

最後に、延岡市街の南部に位置する愛宕山にあるアイヌの墳墓の発掘調査を実施した。その結果、この墳墓は上層部が貝塚で、下層部を構成する砂層の中に重ねられた2つの石棺があることが分かった。しかも、その墳墓の傍らにはメンヒルが立っていた。重ねられた石棺の上方からは歯の一部、下方からは頭蓋骨がでてきた。これらの歯や骨は石器時代の遺物であることは、同層から錘石が出土することからも明白である。さらに、メンヒルが立っていた同じ地層からアイヌの薄手式の土器も出土する。これらのことから、石棺の歯や頭蓋骨はアイヌのものであると断定したわけである。⁴³⁾ かように、日本民族の起源を推定するうえでも、今回の発掘調査は実り多いものであった。

3) 第4回日向調査

鳥居龍藏の日向調査の最後となる第4回目の調査は、昭和4年(1929)5月から7月にかけて実施された。⁴⁴⁾ 今回の調査も前回の調査など

第2表 「大陸派」と「細島アイランド」の出土品などの比較

	「大陸派」	「細島アイランド」
槨	無槨	有石槨、玄室、羨道あり
棺	粘土棺、組み合わせ石棺 掘り抜き石棺あり	なし
遺物	多少	多し
土器	稀、あるいはなし	あり
刀剣	比較的多し	剣なし
巨石	用いず	用いる

〔出所〕鳥居龍藏(1926)『第2回第3回延岡附近古墳調査』東臼杵郡史蹟調査会刊、鳥居龍藏(1976)『鳥居龍藏全集 第4巻』朝日新聞社576～599ページ所収、596ページより一部修正して引用。

と同様に、内藤子爵家の協力を得、調査期間中の宿泊の大部分を同家に依存して発掘などに従事した。東京からの同行は君子夫人であった。

今回の調査コースは、東京から神戸まで列車を利用し、神戸から別府までは瀬戸内海航路の船に乗船した。別府では、昭和2年に発見した長松寺境内にあるドルメンなどの再調査を行なった。別府からは列車で延岡に向った。延岡では各種の機関に表敬訪問や挨拶などをすませた後、一路南下し、予備調査のときにも調査を試みた西都原古墳などを数日間費やして発掘調査に従事して延岡に帰ってきた。延岡での宿舎は前述したように内藤子爵家を借用することとし、同家を拠点として本格的な発掘にとりかかった。

最初に発掘したのは地茂森古墳であった。同古墳発掘の結果、内部に東西方向に並列して並んでいる2つの粘土棺の存在を確認したが、西方に位置する粘土棺内部に粘土で作製された人面石があることが判明した。その人面石の人相は、先年に発掘調査した大峽遺跡の岩石に彫刻された人の顔に大変類似していることなどから、日向に存在する古墳としては極めて原始的なものであるという印象を強くもった。

その後、天下において未盗掘の完全な横穴⁴⁵⁾を発見し、発掘した。南九州では完全な状態の横穴を総合的に調査したのははじめてのことであった。さらに、大貫、上舞野などにおいて古墳やドルメンの発掘に従事した。⁴⁶⁾ かくして、延岡周辺の発掘調査を終了すると、南下し鹿児島県に向った。「三陵」⁴⁷⁾の参拝巡礼が目的であったが、その他隼人塚なども見学した。その後、再度延岡に戻るのであるが、その途中、下吉松と栗野との中間にある熊峯山土の巨石遺跡の調査を行なった。この発掘においては、ストーンサークル・メンヒルさらには神籠石と推定される濠などを発見するという成果をあげた。

延岡に到着すると、地元の研究者⁴⁸⁾に依頼していた恒富村の美須古墳の準備がうまくいっていなかったのも、その指揮にあたり発掘にとりかかった。美須古墳の発掘が無事完了すると延岡での調査を終えて、別府経由で東京に帰った。

以上みてきたように、今回も延岡周辺の古墳の発掘調査が主目的であったが、往路・復路とも途中の別府でドルメンを調査したり、鹿児島県での「三陵」参拝巡礼の帰路熊峯山上の巨石遺跡を発掘するなど、美須古墳で銅製経筒などを発掘した古墳調査よりもむしろドルメンなどの巨石遺跡の方に学問的関心がむいていたという感じがする調査であった。かかる点は、翌昭和5年から実施した蒙古を中心とする調査⁴⁹⁾の主目的の1つがドルメン・メンヒル・ストーンサークルなどの巨石遺跡の発掘であったことから、鳥居龍藏の今回の日向調査においても、学問的関心の方向はかかる方向にあったのかも知れない。

3. 日向調査の成果

鳥居龍藏が実施した日向調査は、前章でやや詳細に述べた如く、合計4回行なわれた。日向調査の直接の動機は、宮崎県知事による依頼であった。また調査には、旧藩主内藤子爵家をはじめ地元の各種の行政機関や研究者の協力・援助を受けた。かように、多大の協力・援助の下に実施された発掘を主体とする調査の結果、多数の出土品をはじめ、大くの学問的成果がもたらされた。かかる鳥居のフィールドサーヴェイの成果の中から、以下ではとくに注目されているものを中心に限定して検討を加えていくことにする。

鳥居龍藏の日向調査は、古墳（横穴も含める）発掘調査と、巨石遺跡発掘調査に区分することができる⁵⁰⁾（第3表A・B）。ただし、具体的な発掘調査の成果の分析を行なう前に、両区分の

発掘調査に共通している鳥居龍藏の日向調査に取り組む学問的態度や分析視角について、検討しておくことにする。かかる理由は、鳥居は前後4回にわたり、多数の古墳や遺跡を主体とするフィールドサーヴェイに従事するのであるが、これらの発掘調査を中心とするフィールドサーヴェイに関しては、終始一貫した学問的態度でもって調査を実施した、と推定できる。すなわち、かような学問的姿勢を貫いたからこそ、多大の研究成果をあげることができたと考えられるのである。

鳥居龍藏は、「日向に於ける考古学上、文化史上、その極盛にしてかつ一大特徴あるは、実に原史時代（Protohistoric）すなわち上代カミツヨであるといわれねばならぬ。」⁵¹⁾と日向調査に関する詳細な報告書の冒頭でも論じているように、日向の原史時代の解明を主目標として、フィールドサーヴェイを行なったのであった。その場合の分析視角として、鳥居は自身のもっとも得意とする分析手段である原史考古学（Protohistoric Archaeology）の手法を用いることにしたのである。⁵²⁾ このように、鳥居龍藏の

第3表 発掘遺跡の概要

主な遺跡名	(A) 巨石遺跡 出土巨石						
	ドルメン	メンヒル	ストーンサークル	ケルン	原始石槨	石器	ストーンヘンジ
可愛獄		○	○		○		
行騰		○	○			○	
大峽	○	○	○	○			
米山		○	○				
伊勢が浜		○					○

外形	主な遺跡名	(B) 古墳（横穴を含む） 有石棺のタイプ				主要埋蔵品
		有粘土棺	有石棺	有木棺	有石棺	
A	天下	○				石斧・曲玉・竹櫛
B	檜山	○				剣
B	七曲	○				小刀・曲玉
D	地藏ヶ森	○				
D	ミサキ森	○				
D	三須	○				高坏・経筒
A	浄土寺	○				竹櫛・剣・鏃
C	小野		○			硝子玉・剣・鏃
C	吉野		○			人骨・刀剣・鏃
D	坊内山		○			
D	下舞野		○			
①	大貫丸塚山			○		平板・小刀子・釘
②	伊勢が浜				○	鏃
C	大貫				○	矛・曲玉・鏃
E	大塚丸塚山					管玉・刀
E	天下経塚					高坏・紡錘車・鏃
E	祝子コントバ					土器・金環

凡例 A. 柄鏡式古墳 B. 前方後円墳 C. 円墳（墳） D. 土墳 E. 横穴 註）①自然の丘陵 ②不明出所）鳥居龍藏（1935）『上代の日向延岡』鳥居人類学研究所、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集第4巻』朝日新聞社249～478ページより作成。

日向でのフィールドサーヴェイは、明確に分析視角を原史考古学的手法で実施することを最初から決めていたため、現地では（考古学的な）発掘調査が主体となったのであった。⁵³⁾

しかも、フィールドサーヴェイを実施する地域を日向国全体に拡大しないで、延岡一帯に限定した。このように延岡一帯に限定した理由は、当地域は現在でもそうであるが、原史時代すなわち上代に遡れば、山野には広葉樹林（いわゆる照葉樹林）が繁茂し、海産物および農作物とも非常に豊かで、生活の場としては最適で、『記』・『紀』に記載されている国津神系の人々が居住している典型的な地域である⁵⁴⁾ から、と説明している。なお、フィールドの対象とした延岡一帯は、原史時代から人々が居住しはじめたのではなく、それ以前の時代つまり有史以前から連続して居住し続けている。そのため、有史以前のことも調査する必要があるとした。すなわち、

要するに我ら祖先はこの遼遠なる古い過去（有史以前のこと―筆者註）から此処に居住し、それが長い歳月を経過するとともに、その生活が変化し、その文化が向上し、ついに原史時代（上代）に到着したのである。これで見ると、吾人祖先の原史時代を形成したのは、非常に長い歳月を費やして居ることが知れる。⁵⁵⁾と論じ、あくまで調査の主対象は原史時代であるが、有史以前の調査の重要性も強調している。

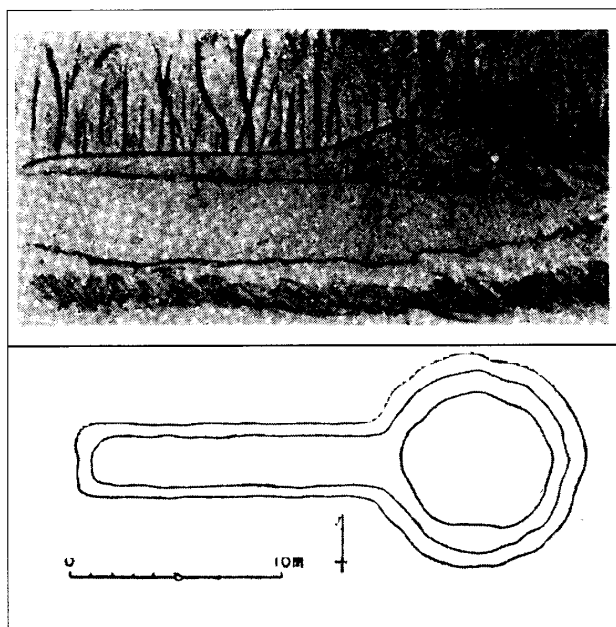
1) 古墳調査

鳥居龍藏の主要な対象は、前述したように原史時代であるが、かかる時代を代表する遺跡として古墳をとりあげ発掘調査に従事した。すなわち、鳥居は、原史時代すなわち上代の文化や生活様式⁵⁶⁾ (genres de vie) を主としてその墳墓および埋葬品によって説明しようとした。そのため、古墳調査においては墳墓の発掘が中心となった。そして、すべての古墳の発掘に際し

ては、正式の発掘手続きを県ならびに関連機関に申請し、その許可を得ることは当然のこと、神職に乞うて厳正な霊祭を行なった。これらが終了した後に発掘にとりかかった。⁵⁷⁾ 鳥居は、延岡一帯の古墳を、通常の区分のメルクマールとされる築造年代や外形による区分ではなく、その内部におかれている棺の材質などから第3表に示したように、5類型に区分している。

吉野村（現延岡市）にある天下の古墳は、上述の5類型の中の代表的な有粘土棺古墳である。同古墳は延岡市街の西部に位置する丘陵上にある。この丘陵は南北にほぼ同様の小丘があり、それぞれの小丘に有粘土棺を内蔵している古墳が存在する。また南方の小丘上には天下神社も鎮座している。⁵⁸⁾

これら南北の小丘上にある両古墳は、外形もまったく同様なため、両古墳は関連があると推定できる。つまり、両古墳は、ともに前方部が非常に細長く、しかも幅も狭く高も低い形式の墳墓で、かつて女性が愛用していた手鏡に類似



第2図 天下神社傍らの柄鏡式古墳
〔出所〕鳥居龍藏（1935）『上代の日向延岡』鳥居人類学研究所、鳥居龍藏（1976）『鳥居龍藏全集 第4巻』朝日新聞社 310ページより引用

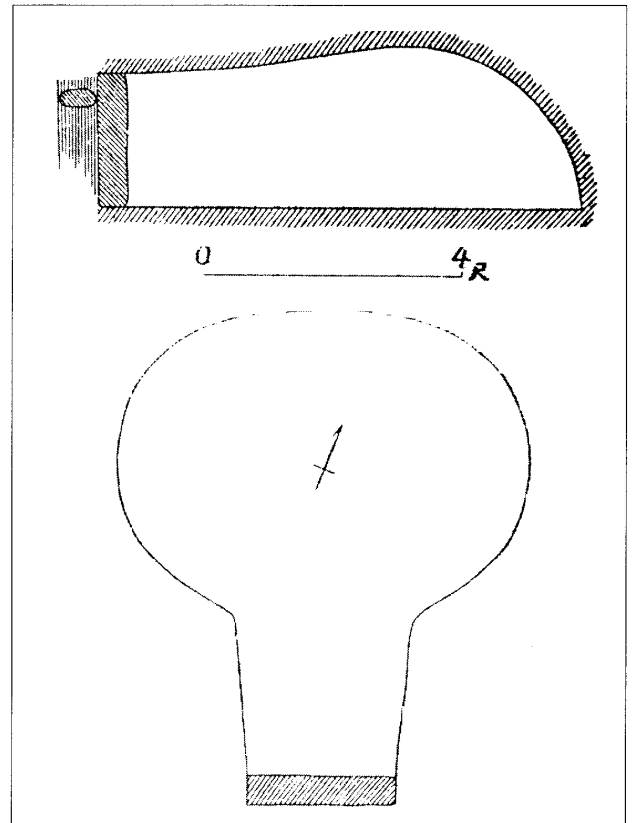
している。そのため、柄鏡式古墳⁵⁹⁾と称される(第2図)。なお、北方の小丘上の古墳からは分銅形の打製石器なども出土する。それ故、両古墳がある丘陵には有史以前から人々が居住しており、その後に原史時代人がここに古墳を築造したのである。粘土棺の内部から曲玉・管玉・竹櫛などの埋葬品が出土したが、埋葬されているはずの人体は既に消滅したものか存在しなかった。その他、棺内から小刀1振が出土した。これらの埋葬品などから推測すると、日向としては相当高貴な人物の奥津城であったと思われる。⁶⁰⁾

以上述べた粘木板や石棺をもつ古墳は、延岡一帯ではよくみかけられる。しかし、石槨式古墳は北九州から中部九州にかけて多くみられるにもかかわらず、延岡一帯では極めて少ない。その数少ない事例の1つが南方村大貫の有石槨古墳である。この古墳の封土は、盛土をして円墳となしている。その内部に石槨がもうけられ、羨道と玄室の2室より構成されている。石槨の壁は大きな石を上手に組み上げたもので、玄室の天井には4枚、羨道の天井には5枚の巨石がのせられている。この古墳は早くから発掘され、入口は開いており、そこに祠が祭られている。

上述したように、同古墳は既に発掘されていたが、念のため玄室の跡を発掘すると土器製の坏の蓋、刀の破片、鏃2本などの埋葬品が出土した。これらの遺物から判断すると、元来はもっと多くの埋葬品が存在したと推定できる。また、この古墳の埋葬品などから推測すると、横穴(古墳)の埋葬品と同じものが出土しているようである。かかる点は両墳墓の関連性を考えるうえからも、大変注目値する。⁶¹⁾しかし、延岡一帯においてかかるタイプの古墳が少ないのは、同古墳の発生地は国外で、後世にその影響が漸次北九州から当地に南下したものでないか、と看做される。⁶²⁾すなわち、大貫の有石槨

古墳の存在は、有史以前に北九州から当地に移動してきた集団が少なからずいたことを示しているように思われる。

なお、横穴古墳の代表的な事例としては、天下経塚の横穴があげられる(第3図)⁶³⁾。経塚



第3図 天下経塚の横穴

(上図) 横穴の縦断面図 (下図) 横穴の平面図

〔出所〕鳥居龍藏(1935)『上代の日向延岡』鳥居人類学研究所、鳥居龍藏(1996)『鳥居龍藏全集 第4巻』朝日新聞社44ページより引用

という名称が付けられているのは、横穴のある小丘上に天文年間(1532-1555)に建設された経塚があるからである。この小丘の南の裾に東西2つの横穴がある。発掘の結果、西の横穴には埋葬品が何もなかったが、東の横穴の入口の石戸の下からは陶の器の甕(いわゆるかつての朝鮮土器の甕)の破片が、玄室からはおびただしい坏や皿などの土器があった。しかし、玄室内にはそれ以外の埋葬品は存在しなかった。ところが、横穴の両北隅には紡績車・刀・鏃など

が置かれていた。その中でも、とくに注目されたのは紡績車である。紡績車は全国の各地の古墳でも出土しているため、これを模造品と考える研究者も多い。しかし、鳥居は、これに小棒を通すと機織り道具になる。かかる機織り道具を死者とともに葬る事例は、フィリピンの先住民や台湾のヤミ族などにもみられる。これらのことから、同横穴の住民は南方からやって来た集団（例えば隼人など）か、あるいはその集団に影響を受けた人々であろうと想像をたくましくする。⁶⁴⁾

2) 巨石遺跡

大峽は溪谷の間に形成された小盆地上に位置している。この盆地内にはドルメン・カリン（積石塚、ケルンとも呼ばれる）・ストーンサークル・メンヒルなどが群をなして存在している。このため、当遺跡は大峽巨石遺跡と称されている。かように、小盆地には巨石遺跡が多数存在するため、石体を御神体としている神社（竹谷神社）も鎮座しているほどである。しかしながら、かような巨石の大部分は、一般家庭の庭石の材料として最適なもののなので、運び去られ現在ではこの地から消滅している。⁶⁵⁾

大峽巨石遺跡の中でもとくに注目されているのはドルメンである。ドルメンは、発掘の結果、

まず地を少し掘り、人為で谷間から1個の巨石を運び来り、下に敷き、石床とし、その石床の周囲に石で支えを設け、また谷間から巨大な1個の石を取り来り、その上に載せたものである。⁶⁶⁾

ということが判明した。さらに、ドルメンを中心にストーンサークルがとり囲んでいることも

分かった。

以上からこの大峽巨石遺跡に代表される延岡一帯の巨石遺跡は、出土する巨石の状態から推察すると、主として宗教的関係の遺跡であることは明白で、そのことが特色となっている。かかる事実からも延岡一帯がいかに古国であるか想像することができる⁶⁷⁾、と結論づける。また、このように、有史以前の日向さらには日本を考察するうえからも、大峽巨石遺跡など延岡一帯の巨石遺跡は大変興味ある資料を提供してくれるのである。しかし、これらの巨石遺跡に関する論攷は他日改めて発表する著作によって行なう⁶⁸⁾とし、巨石遺跡を作成した集団の実態や巨石文化については、それが確認できるという点を指摘するにとどめ、分析・検討を行わなかった。⁶⁹⁾

4. 結論

鳥居龍藏は、生涯の大部分をかけて、我が国は勿論のこと、東アジア各地にまで出かけてフィールドサーヴェイを実施してきた。そして、そのフィールドサーヴェイに基づいた莫大な量の研究業績を有している。本稿の目的は、鳥居の数多いフィールドサーヴェイの中でも、日向とりわけ延岡一帯で行なったフィールドサーヴェイに限定して、分析・検討を加え、鳥居龍藏の研究の一端の解明を目指そうとするものである。かかる最大の理由は、本稿の冒頭部分においても述べたように、鳥居龍藏に関しては、近年わが国を代表する博物館・資料館においては特別展が開催されるなど、一定の評価が与えられているが、それは、鳥居がフィールドサーヴ

第4表 フィールドサーヴェイの方法

	調査方法	調査地域	調査内容
フィールド サーヴェイ	インテンシヴ	広い範囲 (地域・地方など)	多方面の事項を総合的に行なう
	エクステンシヴ	特定の限定された範囲 (地点など)	テーマを限定し、深く専門的に行なう

エイにおいて撮影した写真あるいは収集した民具などに限定されているという怨が残っている。すなわち、鳥居龍藏が評価されているのは、これらの写真あるいは民具だけであり、上述した莫大な量にのぼる研究業績に関しては、なお等閑視され続けている状況であるといえよう。

かような状況を克服しようとするための作業過程で作成されたのが本稿である。本稿の論旨に関しては再度要約する余裕をもたないが、数ある鳥居のフィールドサーヴェイの中で、日向調査をとりあげたのは次のような理由からである。

すなわち、鳥居龍藏に限らず、フィールドサーヴェイを研究の基盤あるいは根底としたり、重視している研究者は多数存在し、それぞれの研究者が所属している学問分野も、考古学・民族学（文化人類学）・民俗学および地理学などを筆頭に多岐にわたっている。さらに、フィールドサーヴェイと称しても、個々の研究者あるいは各々の学問分野において、その意味するものは多少異なっているように思われる。しかしながら、かような問題点を内包しているのであるが、フィールドサーヴェイには、拙著⁷⁰⁾などで指摘したように、次の2つの方法が考えられる（第4表）。

その第1の方法は、フィールドを地域あるいは地方などやや広い範囲を対象とし、そのフィールド内にある多方面の事象を総括的に調査するもので、エクステンシヴ調査と称されているものである。わが国でエクスカション（巡検）と呼ばれているものがこれに該当する。第2の方法は、前者のようにフィールドを広範囲に設定するのではなく、ごく限定された特定の箇所を制限し、そのフィールド内で研究者の目的にあった特定テーマのみを集中的・専門的に調査するもので、インテンシヴ調査と呼ばれているものである。フィールドサーヴェイは、

例えば、最初にエクステンシヴ調査を実施し、その結果をみて、特定の地点が選定され、そこをインテンシヴに調査するのが理想とされるように、2つの調査方法は互いに補完関係にあるといえよう。

日向調査は、予備調査においては南九州各地を調査するエクステンシヴ調査の性格が強くていて、以降の第2回から第4回の調査は、延岡一帯にフィールドを選定した典型的なインテンシヴ調査であると看做される。第4表および前述した内容からも推察できるように、フィールドサーヴェイを実施する場合、エクステンシヴ調査の方がインテンシヴ調査よりも、特定のテーマを集中的・専門的に調査するため、研究者自身の学問的姿勢やテーマに関する分析視角が明確に表現される。日向調査は、まさにその典型的な事例であるといえる。

つまり、対象地域は延岡一帯と特定され、しかも年代は有史以前から原史時代に制限される。そしてフィールドサーヴェイの分析視角としては原史考古学的手法が用いられている⁷¹⁾からである。

このように、日向調査は、鳥居龍藏の多数のフィールドサーヴェイの中でも典型的なインテンシヴ調査であったといえるが、鳥居は、フィールドサーヴェイを実施する場合、日向調査にみられるインテンシヴ調査よりもエクステンシヴ調査に力点をおいた調査を行なう場合が多かった。理由は、東アジアを中心とした国外調査に多くみられるのであるが、鳥居龍藏がフィールドサーヴェイを実施した地域のほとんどは、他の研究者の誰もが調査したことのない「空白地域」であった。そのため、特定の箇所を集中的に行なうエクステンシヴ調査よりも、広範囲な地域を総括的に実施するエクステンシヴ調査を行なわざるを得なかったことも、一因となっていると考えられる。⁷²⁾

しかしながら、日向調査は日本建国と深く関連があるとされることもあり、上述した意味での「空白地域」ではなかった。すなわち、日向は、本文でも記述したように、東京帝国大学・京都帝国大学を筆頭に当時とすれば最高のスタッフによる現地調査が数ヶ年継続して実施されたことにみられるように、多くの研究者が研究している地域でもあった。この東京帝国大学・京都帝国大学を中心とした大調査団による成果は、個々の遺跡などの調査は報告書という形式で出版されたが、調査成果を最終的にまとめた報告書は出版されないで終わった。この点は、本文でも紹介したように、調査を依頼した宮崎県知事ら地元の関係者が予想していた結論と一致しないために、出版がみあわされたとされている。ただ、その調査スタッフの1人であった喜田貞吉が、本人の担当した分野を中心に日向の古代史に関する研究書を出版したにすぎない。かかる出版も、当時の宮崎県知事の求める内容と異なるため出版が相当おくれたものであった。

鳥居龍藏の場合、東京帝国大学・京都帝国大学を中心とした大調査団と同様に、宮崎県知事から調査の依頼を受けたが、

古事記なり日本書紀なりに記述されている伝説・神話というものは、最初の話が伝えられてから、その文字となったまで、どれほど正しく伝えられたか、またはどれほど伝えが違って来たか、これはよほど研究して見なければならぬ。

そして、これを編纂した時、その九州や日向の伝えというものは、これを語り伝えた人というものは、どうせ、大和とかないしは畿内の人であって、間接に伝え語られていた事柄を文字に現したものであろうから、その内にはよほど尠なからざる相違もあることを想像して見なければならぬ。であるから、そ

れらの伝えと今日の地名と比較しても、その場所が符合せず、また地名などの違って合合わないということはむしろ当然のことであって、むしろ似ているならば似ているのが不思議である。同じであるのが 不自然である。

73)

という態度を堅持し、『記』・『紀』を参照しないで、本人が発掘した遺跡・遺物などを資料として、論を組み立て、展開していった。かかる点こそが、筆者が最初に指摘した鳥居の実証主義的な立場に立った研究といえよう。

しかしながら、鳥居龍藏が行なったフィールドサーヴェイに基づく成果の1つであるストーンサークルは、現在では縄文時代の北海道と秋田県にみられる環状列石に限定されており、鳥居の主張は退けられている。このように、主として時代的な制約があるためか、鳥居龍藏が発掘したものがすべて現在では承認されているものではないが、『記』・『紀』の神話に出てくるより以前（鳥居のいう有史以前）に当地に既に人々が居住しており、巨石文化を形成していたことは否定できないであろう。しかも、この巨石遺跡をつくった人々が北方からやって来た集団であるという指摘は、横穴の住民が南方系の集団と推定されることと合わせて、鳥居の日本文化および日本民族の起源を解明しようとする際の強力な資料を提供したものといえよう。

本稿の残された課題としては、ほぼ同年代に同じ徳島県に生まれ、東京帝国大学構内でも度々顔をみあわせた喜田貞吉⁷⁴⁾も同時期に日向調査を実施した。また、民族問題など両者の研究は重なっている場合が多い。鳥居・喜田の両研究者を比較考察することで、鳥居龍藏の学問的姿勢や分析視角をより明らかにできるのではないかと考えられる。今後の研究課題とした。

〔註〕

- 1) 田畑久夫 (1997)『民族学者 鳥居龍藏 アジア調査の軌跡』古今書院 V～VIページなど。
- 2) 中藺英助 (1995)『鳥居龍藏伝 アジアを走破した人類学者』岩波書店。ただし、同書においては、沖縄に関して1章を論じている (同書、107～133ページ)。
- 3) ただし、大和および沖縄に関する鳥居龍藏の調査・研究については、以下の拙論で論じたことがある。

田畑久夫 (1992)「鳥居龍藏と大和－幾内調査を中心に－」日本文化史研究16 40～58ページ。

田畑久夫 (1999・B)「鳥居龍藏の沖縄調査－調査記録などの分析を通して－」昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要8 97～115ページ。

4) 田畑久夫 (1998)「鳥居龍藏の朝鮮半島調査－調査記録などの分析を通して－」昭和女子大学文化研究2 32～63ページ、54ページ。

5) かかる最大の原因は、調査・研究に従事した時期の時代的な制約があったとはいえ、鳥居龍藏が海外でフィールドサーヴェイを実施した東アジアの地域の多くは、日本軍が占領したり、侵略を行なってきた地域とほぼ一致していることがあげられる。

6) 例えば、故中尾佐助・佐々木高明が提唱した照葉樹林文化論や、江上波夫が主張する騎馬民族国家論などが、かかる立場の代表といえよう。なお、前者の照葉樹林文化論に関しては、以下の拙著を参照されたい。

田畑久夫 (1990)「照葉樹林文化論と雲貴高東部の少数民族の生業形態」兵庫地理35 43～58ページ。

田畑久夫 (1991～1993)「照葉樹林文化論の背景とその展開(1)～(3)」兵庫地理36 25～35ページ、同37 28～43ページ、同38 12～34ページなど。

7) かような関連諸分野を学問的対象とする研究分野は、鳥居龍藏のいう「人種学」的研究にほぼ等しいと考えられる。すなわち、鳥居が主張する「人種学」的研究とは、自身が明確に定義していないが、以下の論攷の中で次のように論じている。それを要約すると、身長や頭形などの身体的特徴に関するものだけではなく、その民族の歴史 (考古学的な事実も含む) や固有の風俗習慣、さらには地名、伝説・神話などをも含む総合的な分野であると看做した。

鳥居龍藏 (1913)「満州より北朝鮮の旅行 (高句麗遺跡の一斑)」東洋時報179・180 鳥居龍藏 (1976)『鳥居龍藏全集 第12巻』朝日新聞社 620～637ページ所収、621ページ。

8) 周知のように、鳥居龍藏のライフワークといえ、契丹すなわち遼の文化に関する研究であると思われる。しかしながら、かかる研究は『考古学上より見た遼之文化 図譜篇 4冊』(東方文化学院、1936)が出版されたのみで、原稿はすべて未定稿に終わっている。

9) すなわち、後述するように、鳥居龍藏の日向調査は、大正2年 (1913) から昭和4年 (1929) までの期間に合計4回実施された。その期間中に、日本文化および日本民族の起源や源流を含む諸問題についての要約・展開した、以下にみられる2冊の大著を刊行している。

鳥居龍藏 (1925)『有史以前の日本』磯部甲陽堂、鳥居龍藏 (1975)『鳥居龍藏全集 第1巻』朝日新聞社 167～453ページ所収。

鳥居龍藏 (1925)『人類学上より見た我が上代の文化・』叢文閣、同上書 (1975) 1～166ページ所収。

なお、前書は大正7年 (1918) に初版を出版し、9版まで刊行した。しかし、大正9年 (1920) 印刷所の火災で紙型を焼失し絶版となった。そこで、大正14年 (1925) に従来の内容の一部をそのままとし、さらに新しい研究成果を加えた改訂版を同名の新著として出版した。

10) 現在では中国東北地区と称されている地域である。本稿では、従来から筆者が拙著、拙論などで行なってきたように、鳥居龍藏が活躍した時代に合わせて分析・検討を加えているため、文中の地名などに関しては、原則として鳥居が使用している当時の呼称名で表記する、という方法を踏襲した。

11) 鳥居龍藏が第2回「朝鮮の調査」と称しているフィールドサーヴェイである。この調査は、明治45年(1912)10月から翌大正2年(1913)3月上旬まで実施した。なお、後年に出版された自身の手になる回顧録には、明治45年に調査を開始したと記されている。

鳥居龍藏(1953)『ある老学徒の手記 考古学とともに六十年』朝日新聞社、鳥居龍藏(1976)『鳥居龍藏全集 第12巻』朝日新聞社 137~344ページ所収、227ページ。

12) 鳥居龍藏の海外におけるフィールドサーヴェイの特色を、西南中国調査を事例として論じたことがあるので、参照されたい。

田畑久夫(1999・C)「鳥居龍藏のフィールドサーヴェイー西南中国調査を事例としてー」岐阜地理43(「伊藤安男会長古稀記念論文集」) 162~165ページ。

13) 鳥居龍藏は、明治38年(1905)に東京帝国大学専任講師を嘱託され、身分的にはさらに安定した。しかしその後、理科大学の専任講師の職にありながら、文科大学の講義を聴講したことなどから、文科大学の諸先生の知友が増加した。そのことで学内での立場が悪くなった。そのため、学内での研究よりも国外に出かけフィールドサーヴェイを行なうことを希望していた時代でもあった。

前掲11) 鳥居龍藏(1976) 235~239ページ。

14) 朝鮮半島北東部にある旧道名。中心を咸鏡山脈が走っている。現在の咸鏡北道および咸鏡南道がほぼ咸鏡道に該当する。元来は、女真族

すなわち金国の領地であったが、李朝に至り朝鮮族の領地となった。

15) 鳥居龍藏は、朝鮮半島調査を実施する以前、明治34年(1905)、明治42年(1909)の2回満州調査を行なっている。

16) 前掲4) 43~44ページ。

17) 以下の西都原古墳群発掘の経緯は、主として以下の森貞次郎の解説によった。なお、森によれば、この調査は東京帝国大学・京都帝国大学・帝室博物館および宮内省の専門研究者に依頼されたものだった。発掘は御陵墓参考地に指定されている男狭穂塚および女狭穂塚を除いて行なわれた。しかし、その成果である報告書によれば、知事が当初期待していたものとは異なり、日本建国神話との関係について終始まったく触れられることがなかった。

森貞次郎「解題」、鳥居龍藏(1976)『鳥居龍藏全集 第4巻』朝日新聞社 629~640ページ所収、634ページ。

18) すなわち、大正2年(1913)、大正14年(1925)、大正15年(1926)、昭和4年(1929)に調査を行なった。しかしながら、これらの日向の古墳を中心とした調査の成果をまとめた下記の書物などにおいては、大正14年調査を第1回調査、同15年調査を第2回調査、昭和14年調査を第3回調査とそれぞれ呼び、最初の大正2年調査は回数に入れられていない。そこで、本稿では、かかる大正2年調査を日向予備調査と称することとした。その理由は、調査・報告書においては上述の立場とは異なり、大正14年調査を第2回延岡付近古墳調査と称していることなど、異同がみられる。また、それぞれの調査の名称も著書と調査報告では一定していないので、かかる意味からも本稿では日向調査として統一しておいた。

鳥居龍藏(1935)『上代の日向延岡』鳥居人類学研究所、前掲17) 245~478ページ所収。

鳥居龍藏 (1926)『第2回第3回延岡附近古墳調査』東臼杵郡史蹟調査会刊、前掲17) 576、599ページ所収。

19) 当初は、日本建国の歴史を解明したいという、有吉宮崎県知事の意向などを受けて、その最大の候補地であった西都原古墳群の発掘調査に力を注いだ。しかしその後、日向予備調査においても延岡一帯の石器時代の貝塚などの発掘調査に従事してみると、延岡周辺は『記』・『紀』の神代に関連を有するにもかかわらず、誰一人としてかかる地域の発掘調査をした研究者がいなかった。そこで、第1回日向調査においては、延岡一帯における古墳が中心となった。つまり、鳥居龍藏の発掘調査の主体は、西都原古墳群から北部の五ヶ瀬川下流の延岡周辺へと移行するのであった。

20) 鳥居龍藏の日向予備調査に関しては、以下にみられるように、調査終了後論攷および報告書が出版されている。本稿では、コースに関してこれらの著作を参考にした。

鳥居龍藏 (1917)「日向に於ける有史以前の遺跡に就て」人類学雑誌32-5。

鳥居龍藏 (1918)「日向古墳調査報告」宮崎県史蹟調査報告3、前掲17) 552~576ページ所収。なお、上記鳥居龍藏 (1917) の論攷も、本報告書の第1章に入れている。

21) かように、鳥居龍藏は発掘したり、発見したものと、絶えずそれらを類似したものと比較するという学問的姿勢がみられる。かような研究方法は、現在では人文地理学を筆頭に、フィールドサーヴェイを基盤とする学問分野においてはむしろ自明のこととされているが、現場で確認してからものごとを判断するというのは、いわゆる鳥居の実証主義的な研究態度であるとともに、学問的立場を示す好事例であるといえよう。

22) 周知のように、鳥居龍藏は日本の古代を3

時期に区分している。すなわち、有史以前（先史時代）、原史時代、有史時代である。有史以前は石器時代に相当し、アイヌの石器時代（縄文時代）と鳥居が主張する「固有日本人」の石器時代（弥生時代）に2区分される。原史時代は古墳時代で、有史時代はその後の時代が該当する。しかしながら、日向予備調査の報告書ではかかる時期の区分は踏襲しているが、その内容は、有史以前は石器時代、原史（始）時代は弥生式土器の出土する時代、有史時代は古墳時代というように異なった内容で区分している。本稿では、鳥居龍藏のフィールドサーヴェイに関する一連の研究の一部を構成しているため、3時期の内容を後者の日向予備調査の内容にとられず、前者の鳥居の一般的な分類に従って論じていくことにする。

23) 鳥居龍藏は祭土原と書いている。なお、近くに佐土原（現佐土原町）という地名も存在する。

24) 前掲20) 鳥居龍藏 (1918)、前掲17) 553ページ。

25) 前掲20) 鳥居龍藏 (1918)、前掲17) 554ページ。

26) 本調査の概要は翌大正15年 (1926) に実施された発掘調査と合わせて、以下にみられるように、詳細な調査報告書が出版されている。本稿でも、コースおよび調査の概要などに関してはかかる調査報告書を参照した。

前掲18) 鳥居龍藏 (1926)、前掲17) 576~599ページ。

27) 前掲18) 鳥居龍藏 (1926)、前掲17) 576ページ。

28) 前掲17) 森貞次郎「解説」636ページ。

29) この西都原古墳群の発掘調査も、鳥居龍藏の場合と同様に、有吉忠一宮崎県知事の依頼を受けて実施されたものであった。しかしながら、発掘調査の成果は、有吉宮崎県知事が期待して

いたような方向での結果、すなわち、日本建国史における日向の地位の解明などはできなかった。そのため、発掘調査した個々の古墳などの調査報告書が作成され発表されたが、発掘調査の総括的な報告書の刊行はされずに終わった。また、同様の理由から、調査員の1人である喜田貞吉が有吉宮崎県知事より依頼されて日向古代史を執筆したが、その内容が日本建国史と日向の地位が明確に論じられていなかった点など、宮崎県知事および県当局の意図に満たなかった。そのため、刊行がおくれ、出版されたのは昭和4年(1929)であった。なお、このことや、さらには喜田貞吉の執筆部分が中古史まででそれ以降は喜田の指導の下に日高重孝が執筆したことから、『喜田貞吉著作集』(全14巻、平凡社1981~1982)の中には、この著作は収録されていない。

喜田貞吉(1929)『日向國史』自家版。

その後、喜田の執筆部分のみが下記にみられるように、新たに出版された。

喜田貞吉(1943)『日向國史 古代史』東洋堂。

30) この延岡の有力者とは、本文で前述した村上某である。

31) 天下古墳など延岡一帯の古墳を中心とした発掘調査の概要は、次の書物の中に再録されている。

前掲18) 鳥居龍藏(1935)、前掲17) 257~265ページ。

32) 内藤子爵家からの調査依頼があったのは、次のような理由からであると推定できる。すなわち、鳥居龍藏が発掘調査した古墳の内部に曲玉や管玉とともに、竹製の櫛が出土したが、その竹櫛を、

上代に於ける櫛が竹を以て作りし事由は、既に我が記・紀の神代の巻に於ても記載せるが如く、伊邪那岐命が伊邪那美命を黄泉国に

追い往きませし時、伊邪那岐命は左の御美豆良に刺せる湯津々間櫛の男柱1ツ取り闕ぎて火を燭し、以て闇黒を照らし、伊邪那岐命は右の御美豆良に刺せる湯津々間櫛を引き闕ぎ給へば、忽ち筭を生じ、以て黄津醜女の難を逃げさせ給へる物語に徴するも、当時の櫛が竹製櫛にてありしを考証するに足り、殊にこの古墳より出でたる櫛の両端比較的大なる所以のものは、以て男柱に該当せるものと見るを可とせんか。(前掲18) 鳥居龍藏(1935)、前掲17) 251ページ)

と記していることなどから、鳥居の発掘調査に多大の関心をもったのではないかと推察できる。そのようなことから、内藤子爵家の顧問大島雅太郎を通して直接発掘調査の依頼があった。そこで、南方村村長などに正式の手続きをとり、また宮崎県当局の発掘調査の許可を得るなどして、調査にとりかかったのであった。

33) 鳥居龍藏は、これらの巨石遺跡を有史以前に形成されたものであると看做していた。

前掲18) 鳥居龍藏(1935)、前掲17) 265ページ。

34) この石は、ケルト語でメンヒル(Menhir)と呼ばれている。なお、鳥居龍藏は、日向予備調査直後に実施した大正2年(1913)の第3回朝鮮半島調査において、全羅南道の中心地順天の北方1里ばかりに位置する立石里において、ドルメン(支石墓)の傍らに立っているメンヒルを発見したこともあり、メンヒルに関する知識を有していた。森貞次郎によれば、ドルメン・メンヒル・ストーンサークル(環状列石)などの巨石構築物に対して、鳥居龍藏はとくに関心・興味をもち、精力的に発掘や調査を続け、これらの巨石構築物の存在を主張した。しかし、その中には、鳥居の主観的なものや、真偽不明のものも混っていることもあり、他の研究者から「鳥居さんのドルメン」と呼ばれたものも含

まれているという。なお、徳島県鳴門市の妙見山にある鳥居記念博物館の構内にはドルメンが置かれ、その内部に鳥居龍藏夫妻の遺骨が収納されている。

前掲17) 森貞次郎「解題」637ページ。

35) 前掲18) 鳥居龍藏(1926)、前掲17) 583ページ。

36) 国学院大学の研究科にいる埴端比古と川村真一である、と著作に記されているが、第3回日向調査の直後に発表された調査報告では、人類学の助手小松君(名前は不明)と書かれている。

前掲18) 鳥居龍藏(1935)、前掲17) 252ページ。

前掲18) 鳥居龍藏(1935)、前掲17) 590ページ。

37) 第2回日向調査と同様に、調査コースに関しては報告書などに詳細な記載がみられない。そのため、正確なコースは不明である。しかしながら、下記の報告書には調査コース順に調査の概略が書かれているので、おおよその調査コースが推定可能である。以下、本文の第3回日向調査のコースおよび概略に関しては、かかる報告書を参照した。

前掲18) 鳥居龍藏(1926)、前掲17) 584～599ページ。

38) 古墳を築くときに使用する盛土に、それ以前の先史時代の遺跡に使用されていた土を使用している場合がある。つまり、この以前の遺跡の存在した正確な場所は不明であるが、古墳の盛土を分析してみると先史時代の人々が当地に居住していたことが判明する。このような遺跡を鳥居龍藏は「移動遺跡」と命名した。つまり、古墳の盛土からそれ以前の先史時代の人々の足跡を知ることができることもありうることを主張したのである。

前掲18) 鳥居龍藏(1926)、前掲17) 591ページ。

39) 鳥居龍藏は、伊勢が浜からその南に展開する荒浜一帯は、人類学上、考古学上からすると「細島アイランド」とでも称すべき細島を核とした1つの地域を構成していると述べている。現在では細島は日向灘に面した小規模な半島となっている。

前掲18) 鳥居龍藏(1926)、前掲17) 594ページ。

40) その他、海岸線から内陸に入った延岡周辺の古墳の様式もすべて、このタイプ(「大陸派」)であるとする。

41) 前掲18) 鳥居龍藏(1926)、前掲17) 596ページ。

42) 前掲18) 鳥居龍藏(1926)、前掲17) 598ページ。

43) 鳥居龍藏によれば、北海道を除く日本列島においてアイヌの骨が出土しているのは、備中(岡山県)の津雲、河内(大阪府)の国府、阿波(徳島県)や仙台などである。しかし、石棺中に葬られかつ傍らにメンヒルが立てられているのは、日本では最初といえる。すなわち、かかる事実、アイヌが九州においてもっとも古い時代の住民であることを示していると推定できることになるとしたのである。つまり、周知の如く、現在の日本人の祖先と考えている「固有日本人」以前に、九州にはアイヌが居住していたことが発掘の結果から認められたと看做したのである。

前掲18) 鳥居龍藏(1926)、前掲17) 598～599ページ。

44) 今回の日向調査に関しては、前回までの調査のように、詳細な調査報告書の類は発表されていない。しかし、これに代わるものとして、調査先から鳥居龍藏と非常に関係の深かった雑誌に通信として掲載された記事が存在する。コースおよび調査の概略については、かかる記事を参照した。

鳥居龍藏 (1929)「南九州通信」武蔵野13-5・6、前掲7) 599~609ページ所収。

45) 鳥居龍藏がいう横穴とは横穴古墳の省略である。その多くは、丘陵の裾に穴を横に穿ち、岩室としてここに死者を葬った。これを一般には古墳と称しているが、その築造方法は、盛土をしたものではなくむしろ墓穴と呼んだ方が適切なものである。

しかし、喜田貞吉によれば、横穴という名称は当初考古学がまだ発達していない時代に、墳丘を成すものはすべて墳墓と考え、横穴を古代穴居の遺跡であると誤認し、これを一般の古墳墓と区別するためにあえて横穴と称したようである。

前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 432ページ。

前掲29) 喜田貞吉 (1929)、前掲27) 398~399ページ。

46) その他第3回日向調査で発掘を行なった「細島アイランド」などにも調査に出かけたが、日程の関係からか本格的な発掘は実施しなかった。

47) 鵜葺不合命の御墓とされる始良山陵、邇々芸命の御墓と伝わっている可愛エノ山陵および日子穗出見命の御墓といわれている高屋山陵をいう。

48) 白土芳太郎・門馬博・橋口良吉など多数の地元の研究者が助手として発掘に参加していた。

49) 今回の発掘調査で助手として協力した三好賢を、写真撮影の技師として同行させている。

前掲7) 326ページ。

50) 勿論、両発掘調査は、例えば「移動遺跡」にみられるように、相互に関連している場合も多々存在するのであるが、両遺跡を築造した時代が明確に異なっていることなどから区分することが可能であると考えられる。

51) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 256ページ。

52) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 256ページ。

53) 鳥居龍藏は、調査の分析視角として原史考古学的手法以外にも、例えば、人類学的手法、民俗学（鳥居のいう土俗学）的手法、あるいは以下にみられるフンボルト (Humboldt, W.v) やルクリュ (Reclus, E) の主著を読破していることなどから地理学的手法などを用いてフィールドサーヴェイを実施することが可能であったと思われる。

Humboldt, W.v (1845-62) "Kosmos, Entwurf einer physischen Welbeschreibung" 5Bde, Stuttgart

Reclus, E (1886) 《de Nouvelle Géographie Univervelle, la terre et les hommes, VOL II》Bruxelles

54) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 256ページ。

55) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 257ページ。

56) かかる用語は、地理学なканずく人文地理学の専門用語ではない。しかし、鳥居龍藏がその主著を読破したルクリュ (1803-1905) とほぼ同世代のブラーシュ (Paul Vidal de la Blache, 1845-1918) が、地理学におけるフランス学派の地理学用語として独特の意味をもたせた概念である。それ故、以降人文地理学研究者を中心にして、この用語は地理学においてよく使用されている。この点からも、鳥居は地理学的な知識があったと思われる。

また、当時年下であったが、後に東京帝国大学において初代の地理学の主任教授となる山崎直方を学友としてもち、山崎の研究の協力依頼を、地元の新聞記事で行なっている。

Dickinson, R.E. (1960) "The Makers of

Modern Geography” Routledge&Kegan Paul,London pp.229~240

鳥居龍藏 (1888)「銅鍬銅器に就て」徳島日日新聞 8月6日 (記事)、前掲17) 541~542ページ所収。

57) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 309ページ。

58) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 310ページ。

59) 日高正晴によれば、とりわけ日向地方にもっとも多く分布する柄鏡式古墳は、前方後円墳の中でも古代の年代に所属するものとして、現在では前方後円墳とは別個の墳墓として区分されているという。なお、この柄鏡式古墳は昭和3年 (1928) に後藤守一が「柄鏡塚」と提唱したことが契機となってこのように命名されたとしているが、それより2年前の大正15年 (1926) に、鳥居が天子の有粘土棺古墳を調査したときには柄鏡塚と称されるものありと述べていることから、後藤守一の命名より早くから日向地方ではこのように称されていた、と推察される。

日高正晴 (1993)『古代日向の国』(NHKブックス) 日本放送出版協会 84ページ。

前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 255ページ。

60) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 317ページ。

61) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 417ページ。

62) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 419ページ。

しかし、延岡一帯には、このタイプの大規模な有石槨古墳ないが、それに類似する小規模の原始石槨古墳は下舞野や天下などにも存在する。かかる事実から、これらの小規模な原始石槨古墳から大貫の有石槨古墳のような大規模な古墳がつけられた、と考えることも可能である。

なお、このことが肯定されるためには、延岡一帯に大規模な有石槨古墳がもっと多く発見されなければならないだろう。

前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 419~420ページ。

63) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 436~439ページ。

64) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 460ページ。

65) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 276~277ページ。

66) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 291ページ。

67) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 459ページ。

68) 前掲18) 鳥居龍藏 (1935)、前掲17) 459ページ。

69) 鳥居龍藏は、日向調査の前後に満州・蒙古に出かけフィールドサーヴェイを行なっている。その調査の目的の1つがドルメンをはじめとする巨石遺跡の発掘調査であった。そのため、これらの地域の巨石遺跡を調査してから、延岡一帯の巨石遺跡を含む巨石文化に関して、持論を展開しようとしたのではないかと推察される。

70) 前掲1) 153~154ページ。

71) かかる点は、考古学の発達が現在ほど著しいものでなかった当時、日向の国でしかもかような研究テーマであれば『記』・『紀』にみられる神話の分析を中心に論を展開するのが、一般的な研究方法でなかったか、と推定される。

72) フィールドサーヴェイにおいて、かようなエクステンシヴ調査を重視する学問分野として、地理学が筆頭にあげられる。鳥居龍藏は、本文中でも言及したように、地理学の知識はかなり吸収していたようである。

なお、以下の拙論でも指摘したように、例え

ば、中央アジア探検史において、その初期に「空白地域」に最初に足をいれたのは、リヒトホーフエン (Richthofen, F.F.v.) ・セミョーノフ (Semyonov, P.P.) ・ヘディン (Hedin, S.) など地理学者あるいは地理学的な素養を有した探検家であった。すなわち、地理学は、「空白地域」をなくす先駆的な役割を担っていたのであった。

田畑久夫 (1999・A) 「1930年代における中央アジア探検－ヘディンの「ロブ・ノール」探検を中心に－」 東アジア研究23 41～62ページ。

73) 前掲18) 鳥居龍藏 (1926)、前掲17) 586ページ。

74) 鳥居龍藏と喜田貞吉の幼少時代から青年時代の接点に関しては、以下の拙論で論じたことがあるので参照されたい。

田畑久夫 (1994) 「喜田貞吉と法隆寺 (上) －法隆寺論争を中心に－」 奈良学研究2 59～83ページ、61～62ページ。